

ベルファストの観光バスツアー考

ポーラ・ゴウリー*
(齋藤元子** 訳)

Paula Gourley

Reflection on a Belfast Bus Tour

Working Paper, No. 27(2012), 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series.

<http://www.conflictincities.org/workingpapers.html>

Translation permitted by the editor

本稿は、今日のベルファストの建造環境に認められる北アイルランド紛争時からの連続性あるいは変容をベルファストの観光バスツアーがいかに物語るかを探究する。このツアーは、筆者が2012年2月にクィーンズ大学の課題レポートのために参加したものである。ベルファストが良い方向に変化していることは間違いないが、「和平合意以降」の都市において、依然として多くのネガティブな局面が存在し、悪化している問題さえもあることを指摘したい。ツアーガイドにより語られるベルファストは、住民の日々の生活体験を斟酌しない歪んだ都市像であり、政治的信条や社会階層や民族愛国主義による分断の様相は、かなり浄化された形で提示されている。

キーワード：ベルファスト、語り、再帰的

ボウル (Boal 2002) によれば、ベルファストは異なる時代において「植民地都市」、「移民工業都市」、「民族愛国都市」といった分類がなされてきた。一都市を一言で定義することは不可能であるが、「和平合意以降」のベルファストは、北アイルランド社会が多様な意見や民族を包み込んで発展しようするための触媒として、極めて重要な役割を演じることは間違いない (Pelaschiar 2000: 117)。筆者は、2012年2月に自ら参加したベルファストの観光バスツアーを事例として取り上げ、ベルファストという都市がどのように知覚され、そして、ベルファストの建造環境にはっきりと表れている紛争時からの連続性あるいは変容をツアーがいかに物語るかを探究する。とりわけ、ベルファストは「ノーマルな都市」であるという見解が、ユーモアを用いてより前向きにベルファストを解釈しようとする傾向の高まり (Schwerter 2007) をいかに実践しているかを考察する。その一方で、このツアーが提示するベルファストは、過去そして現在もプロテスタントとカトリックに分断されている都市の本来の姿ではなく、それが浄化された語り (Wang 1999) であるかを明らかにする。そのために、セグリゲーション、再開発、象徴主義の問題をも扱う。この浄化された語りでは、「ノーマルな都市」の将来が非常に楽観的な見地から提示され、プロテスタントとカトリックが共

存するニュートラルな空間あるいは純粹にニュートラルな空間とそこに住まう人々の公平性を創出するための触媒として経済復興が重要視されていること (Smyth and McKnight 2010) を検証する。本稿では、ベルファストの社会分化の複雑さと民族愛国主義がジェンダーや階層とどのように交差しているか (Smyth 2009) を例証する。また、過去と現在の分断を改善するために最近変貌を遂げたシティセンターに期待をかける国家政策や都市計画がどのように誤ったものであるかを問いかける。

ツアーガイドは最初、1600年代におけるアルスター植民の詳細を語ることによって、ベルファストを歴史的な文脈に位置づけ、次いで、ベルファストが工業の中心地としていかに重要な場所であったかを披瀝した。その際、ガイドはベルファストの北部と西部の織物工場について詳しく触れ、両地域はカトリックが多数を占めているとも語った。そして、カトリック系の人々がハーランド&ウォルフやシロコ・ワークスといった重工業企業の仕事から締め出されていたと指摘し、プロテスタントとカトリックの対立に触れた。しかしながら、ガイドはその一方で、ベルファストのロイヤル・ヴィクトリア病院が世界で初めて冷暖房装置を完備した病院であり、それはシロコ・ワークスによって設置されたことと強調し、住民の対立というベルファストのネガティブな局面

* ベルファスト・クィーンズ大学社会学・社会政策・社会福祉学部学生

** お茶の水女子大学非常勤講師

を軽減しようとしていた（以降随所において、対立が生み出すネガティブな印象を緩和しようとする話題が登場し、これが語りの特徴となっていた）。

ツアーバスがデイヴィス・ストリートに入ると、ここが1969年に北アイルランド紛争が勃発した場所であるとガイドは指摘した。そして、壁面に政治的なメッセージ画を描いたミューラルと呼ばれる壁絵とフェンスが上部に張り巡らされたピース・ウォールと呼ばれるプロテスタントとカトリックの居住区を隔てる壁が紹介された。ガイドは「こちら側は100%カトリックで、反対側は100%プロテスタントである」と明言した。しかし、これはかなり誇張された表現である。この近隣に居住し、プロテスタントとカトリックのミックス結婚により家庭生活を営む筆者自身を含めて、多くの人々の日常生活体験は覆い隠されている。ミューラルは「そこがセクト主義によって占有された空間であることを最も政治的表現に富む方法で証明している」（Bollens 2000: 207）という事実を突きつけられ、筆者は衝撃を受けた。このバスツアーへの参加は、筆者が日々目にしているベルファストとは異なる光景を筆者に提示した。

続いてツアーは、フォールス・ロードにある「インターナショナル・ウォール」に描かれたミューラルへと進んだ。ここのミューラルは、コミュニティ共存プロジェクトによる抑圧への抵抗が描かれており、グアタナモ湾収容キャンプや1981年のハンガーストライキの先人であるキアラン・ニュージェントやブレンダン・ヒューズの姿がある。ガイドはハンガーストライカーに言及したものの、彼らを記念したメモリアル・ガーデンに立ち寄ることはできなかった。と言うのは、市の地域振興局によって設置された街路樹の安全地帯がツアーバスの駐車を効果的に阻止しているからである。この状況は、誰が誰のためにこのような措置を決定したのかという権力の問題を考えずにはいられない。ガイドは「もしインターナショナル・ウォールのミューラルを下車して見学したい人がいるならば、防弾チョッキがバスの座席の下にありますよ」と、ここでもまた空々しいジョークを持ち出した。このようなジョークを交えてフォールス・ロードに住む労働者階級の人々を「他者化」し、それを一例として、「和平合意以降」のベルファストには、民族愛国主義的分断ほど歴然としたものではないにしても、階層など依然多くの分断が存在していることを示そうとしたガイドの姿勢に筆者はかなり狼狽させられた。

それからガイドは、再びポジティブな語りを用い

て、紛争というベルファストの歴史が有するネガティブな局面を軽減すべく、クロナード地区の古い工場群がどのように住宅や事務所に転用されたかを熱心に説明し続けた。そして、北アイルランド紛争が勃発した際、最初に焼き討ちされた住宅はこの地区の「ボンベイ・ストリート」にあったと述べた。「ボンベイ・ストリート」や「カシミア・ロード」といった通りの名称は大英帝国との関連を想起させる一方、道路標識にはゲール語が併記されているという事実が過去と現在の違いを象徴している。しかし、ガイドはそれについては触れず、この地区のピース・ウォールに隣接した場所に聖クララ小学校が建てられたことは、過去においては考えられないことであり、未来に希望を与えるものであると語った。

ここまでの時点で筆者が驚かされたのは、幼い頃から筆者自身が日々体験してきた真の「ベルファスト」をツアーはほとんど提示していないことであった。ツアーがラナーク・ウェイとクーパー・ストリートの「ピース・ウォール」に到着した時、ベルファストにおける過去ならびに現在も存在する分断についてのガイドによる力強い語りが聞けるものと筆者は大いに期待していた。ボレンズ（Bollens 2000: 209）が的確に強調したように、ピース・ラインは争いの原因ではなく、裏に潜んだ政治的そして宗教的紛争の反映であり、これらの障害物はカトリックとプロテスタントの分断を象徴しており、都市政策の決定者や近隣住民にとって重大な問題を生んでいる。それにもかかわらず、ガイドはカトリックとプロテスタントの対立は1969年以前には存在しなかったとその歴史を簡単に片付け、これまでと同じポジティブな語りの手法で、1969年以前のベルファストは造船業、製造業、繊維業、印刷業、タバコ産業で世界をリードしていたと続けた。しかしながら、ベルファストの一居住者として、筆者が「確実である」とみなすことは、自分自身の経験から得た知識に依拠しており、個人的に重要であるか否かに基づいて判断される（McIntosh and Prentice 1999: 602）。このことを斟酌して考えると、このバスツアーは、経験的な知識を有する居住者ではなく、「不確実な経験」（MacCannell 1973）を追い求めている観光客向けのベルファストを提示しているとみなすことができよう。

ツアーはオールドパーク・ロードに沿って進み、アードイン地区の景観を見物するために小さな公園でバスを降りた。ガイドはここを「プロテスタントによって取り囲まれたカトリックの孤島」とであると説明した。アードイン地区は労働者階級の居住地で

もあり、眺望のきくこの地点から彼らの家屋が軒を連ねているのを見るのは非常に面白いと述べた。事実、この公園からの眺めは、ここがいかに貧しく荒廃している地域であるかを強く印象づけ、実に陰鬱である。この地域に親類が住んでいるにもかかわらず、筆者自身は自分が「住宅バブルの断然良い地域」(Mitchell 2010)に居住しており、この地域の貧困状態の深刻さをこの時まで実際には認識していなかったことを思い知らされ、ショックであった。一方、ガイドはこの地区におけるプロテスタントとカトリックの分断や闘争(2002年のホーリー・クロス・女子小学校周辺での争い)には触れることなく、相変わらずのポジティブな口調で、アイルランド共和国の前大統領メアリー・マッカーリスの母親がこの地区の出身であることを熱く語った。ツアー全体を通して、何か少しでもネガティブなことを言わざるを得ない場合、ガイドは著名な人物の名前を最後に登場させ、ネガティブな要素を緩和させようとしていた。ガイドが口にした人物は、コメディアンの方ーク・カーソン、プロサッカー選手のジョージ・ベスト、フルート奏者のジェームス・ゴールウェイ、作家のサミュエル・ベケットなどである。また、ガイドは昔このアードイン地区には目覚まし時計がなく、「ノックする起し人」と呼ばれる人と工場からの警笛が住民を起床させたという話を熱心に語った。この話は、筆者にとって、今は田舎と都会の要素が明らかにせめぎ合っているこの地区にもかつては古いコミュニティ精神が存在し、都会の人間関係は、田舎の「基本的(ゲマインシャフト)」人間関係との対比において、「副次的(ゲゼルシャフト)」であるというワース(Wirth 1938)の主張を例示している(Stevenson 2003)と感じられた。事実、筆者は家族とともにベルファストを離れ3年間地方に居住したことがあるが、個人的な経験から田舎と都会の二分法を証言できる。地方での生活中、筆者はベルファストという都市において自身が経験していた親密で持続性のあるコミュニティ関係の中へ戻る日が待ちきれなかった。しかしながら、ベルファストという都市においては、コミュニティ形成は、「他者」が排除される時、ネガティブな様相を持ち合わせることも忘れてはいない。

さらにツアーはシティサイド・リテール・パークというショッピング・モールへと進んだ。ここはカトリックの居住地区であるニューロッジとプロテスタントの居住地区であるタイガーズベイが接する地域で、ミッチェル(Mitchell 2010)によれば、紛争によってほころびのように放置されていた空地を開

発業者が埋めようと試みた典型的な方法を示している場所である。ガイドは、かつてこの場所にギャラハー・タバコ工場が立地していたことを詳しく説明したが、地元ではこの地域が「紛争過激派による殺人事件の地」(Bollens 2000)として広く知られていることを暴こうとはしなかった。シティサイド・リテール・パークは「共有空間」の創設をめざして建設されたにもかかわらず、再度ミッチェル(Mitchell 2010)によれば、プロテスタントの消費者とカトリックの消費者はそれぞれ異なる出入り口を使用してこの「中立空間」に立ち入り、共有空間を維持するための戦術や規範を争っているかのようなのである。実際のところ、この「中立空間」は異なる方法で消費空間として利用されており、両者の分断は依然明らかに目に見えるものである。ガイドはこのような開発が閉鎖的なコミュニティを崩しうると同時に分断の原因ともなりうることを認識しているはずであるが、それには触れず、「これからセイラー・タウンに移動します。ここは有名なベルファストのコメディアンであるフランク・カーソンが育ったところです」と述べ、「和平合意以降」のベルファストに依然存在している分断を覆い隠すような言葉を再び発した。

ガイドのポジティブな語り口は、ツアーがラガン川の川沿い¹⁾に至り、再開発による「ノーマルな都市」(Neill 2005)としてのベルファストの姿を示そうとした際にも、変わらずに続いた。このエリアは、シネマコンプレックスのオデッセイ、ウォーターフロント・コンサートホール、体験型ミュージアムW5、アイルランドで最も高いビルであるオパールビルの所在地であるとガイドは説明した。Neill(2006: 109)によれば、都市計画は「ノーマルな都市」としてのベルファストのイメージを創出するための公的な努力の最前線であり続けた。にもかかわらず、分断は依然として存在している。さらに、ラガン川沿いの開発は市の中心部をより東側に移行させているように思われる。その結果、ベルファストを「ノーマルな都市」として作り変えようとする際、紛争によって周縁化されていた地域はより一層周縁化する危険性がある。代表的なカトリック居住区であるフォールズと代表的なプロテスタント居住区であるシャンキルはミューラルの展示場と化し、観光客は鉢に植え込まれたような北アイルランド紛争の歴史(Carden 2011: 8)を徒歩で見学できるのである。

実際、ベルファストの将来への希望は、ベルファストにおいて建造された「タイタニック号」という遺

産にかかっているように思われる。一時期のお祭り騒ぎは終わったが、2012年の「私たちの時間と場所」や「ベルファストを訪れる理由 それはタイタニック号」(www.ni2012.com)といったキャンペーンは、国際的なレベルにおいて最下層の都市というイメージから「和平合意後」の都市へとベルファストを変身させるための市場戦略である(Neill 2005: 109)。タイタニック記念館の目立つ建物は、どの角度から見ても2艘の船の舳先を模っていることがわかり、視覚的に目を奪われるものであるとガイドは力説した。さらに、タイタニック号を建造した造船所で働いていた人の大半はプロテスタントであったとガイドは続けた。これらプロテスタントの労働者は、自分たちの親類縁者に同様の仕事を斡旋し、カトリックの労働者の働く機会を奪っていた。しかしながら、ガイドはこの史実を、ベルファストにおけるプロテスタントとカトリックのセクト主義や分断の様相をかなり浄化する形において説明した。

ツアーはストーモント・エステイトへと進んだ。ここは政治家が集い政策決定を行う北アイルランド自治政府議会堂の所在地であるが、ガイドは政策にも政治家にもほとんど言及することはなかった。同様に、ガイドの語るベルファストからは女性の存在は見えてこない。しかし現実においては、スマイス(Smyth 2009)が主張しているように、「ジェンダーと階層間の集団的な連続や緊張が領域性とどのように交差しているかという問題を提起している」(Smyth 2009: 14)点において、女性の存在はきわめて重要である。

その後ツアーはショート・ストランドを訪れた。ここにはイギリスの中でも最大級、かつ人気投票でも上位に位置しているセント・ジョージ・マーケットという市場があることをガイドはしきりに強調し、二つの対立するコミュニティの分断がこの地域にも存続しているという印象を薄めようとしていた。このエリアは現在「マーケット・クォーター」として知られており、中立空間そして／あるいは共有空間の場として特徴づけられたシティセンターの一部である。にもかかわらず、民族愛国主義に関するシティセンターの中立性は定着しておらず、「コミュニティの祭りやパレードが実施される日やサッカーの試合日」(Smyth and McKnight 2010)といった際には、緊張感はことさらに高まる。かつてはシティセンターを取り囲むように環状の鉄柵が張り巡らされ、夕方6時半になると柵は閉じられたとガイドは説明した。そして、今日のコスモポリタン都市としてのベルファストには、バーやレストランをはじめ

とする観光客にとって魅力的な場所が多数あり、英語に次いで中国語とポーランド語が頻繁に話されていると披露した。しかしながら、オドワードとコマロヴァ(O'Dowd and Komarova 2009: 10)が的を射た表現をしているように、「消費中心主義のベルファストは北アイルランド紛争の地ベルファストと共に存在」しつつも、労働者階級の分断させられた居住コミュニティは新しい開発がもたらす利益をまったく享受していない。

要するに、筆者が観光バスツアーで感じたことは、筆者自身の年齢、ジェンダー、階層、民族性そして「北アイルランド紛争」真只中のベルファストに育った経験に影響されている。ベルファストの西部に暮らしてきた筆者は、この地域を家庭と家族が存在する場所とみなしている。この根本的な関係性ならびに仕事、勉強、家事といった日々の生活は、筆者がどのようにベルファストを体験し、いかにそれを感じるかを決定づけている。それゆえ、このベルファストという都市の民族愛国主義による分断、想像上の中立的なイメージ、あるいは魅力的な観光目的地とみなされること、これらはいずれも筆者にとって主要な意味をなさない。この観点から見ると、バスツアーにより創作される歪んだベルファストのイメージは、無数の日々の営みもこの都市の真の姿を形成している政治的、文化的、社会的発展のいずれをも反映しているとは言えない。なぜならば、創作されたイメージは、ジェンダーによる社会的分断の局面を無視し、政治志向や階層や民族愛国主義による分断の状況を言い繕っているという印象が否めないからである。

筆者はベルファストを紛争のみによって規定できる都市とは考えていない。しかし、市の将来を楽観視する思いは、次の事実によって失せてしまっている。その事実とは、「何も持たざる者」(Wilkinson and Pickett 2010)は資源や機会に容易に近づくことができないという事実である。ベルファストが変化しつつあることは疑いないが、「和平合意以降」の状況においても、依然多くのネガティブな局面が存在し、悪化している面もある。ベルファストがうわべだけのイメージ転換(Neillほか 1995: 72)ではなく、真のイメージ転換を必要としている今、分断しているコミュニティが力を合わせ、社会学的な想像力(Mill 2000[1959])を駆使して都市政策を進展させた時、初めてすべての人が利益を享受できる社会変革が可能であろう。

参考文献

- Boal, F. W. (2002) 'Belfast: walls within' *Political Geography*, Vol. 21(5), pp. 687-694.
- Bollens, S. A. (2000) *On Narrow Ground Urban Policy and Ethnic Conflict in Jerusalem and Belfast*, Albany: New York Press.
- Carden, S. (2011) Post-conflict Belfast 'sliced and diced': The case of the Gaeltacht Quarter, Working Paper, No. 20, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Discover Northern Ireland. www.ni2012.com Accessed 20th March 2012.
- McIntosh, A. J. and Prentice, R. C. (1999) 'Affirming Authenticity Cultural Heritage' *Annals of Tourism Research*, Vol. 26(3), pp. 589-612.
- MacCannell, D. (1973) 'Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings' *American Journal of Sociology*, Vol. 79(3), pp. 589-603.
- Mills, C. W. (2000[1959]) *The Sociological Imagination* (Fortieth Anniversary Edition). Oxford: Oxford University Press.
- Mitchell, A. (2010) 'Walking' with de Certeau in Northern Belfast: Agency and Resistance in a Conflicted City, Working Paper, No. 17, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Murtagh, B. (2008) New Spaces and Old in 'Post-Conflict' Belfast, Working Paper, No. 5, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Neill, W. J. V. (1992) 'Anywhere and Nowhere: Reimagining Belfast' *Fortnight* Vol. 309(39), pp. 8-10.
- Neill, W. J. V., Fitzsimons, D. S., and Murtagh, B. (1995) *Reimagining the pariah City*, Hants: Ashgate publishing Limited.
- Neill, J. V. W. (2005) 'Return to Titanic and lost in the Maze: The Search for Representation of 'Post-conflict' Belfast' *Space and Policy* Vol. 10(2), pp. 109-120.
- O'Dowd, L. and Komarova, M. (2009) Regeneration in a Contested city: A Belfast Case Study, Working Paper No. 10, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Pelaschiar, L. (2000) 'Transforming Belfast: The evolving role of the City in Northern Irish Fiction' *Irish University Review*, Vol. 30(1), pp. 117-131.
- Schwerter, S. (2007) 'Belfast between Reality and Fiction' *The Canadian Journal of Irish Studies*, Vol. 33(2), pp. 19-27.
- Smyth, L. (2009) Gender and Public Space in Divided Cities: Dynamics of Everyday Urban Life, Working Paper, No. 11, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Smyth, L. and McKnight, M. (2010) The Everyday Dynamics of Belfast's 'Neutral' City Centre: Maternal Perspectives, Working Paper, No. 15, 'Conflict in Cities and the Contested State' Working Paper series. <http://www.conflictincities.org/workingpapers.html> Accessed 13th March 2012.
- Stevenson, D. (2003) *Cities and Urban Cultures*, Maidenhead: Open University Press.
- Wang, N. (1999) 'Rethinking Authenticity in Tourism Experience' *Annals of Tourism Research*, Vol. 26(2), pp. 349-370.
- Wilkinson, R. and Pickett, K. (2010) *The Spirit Level: Why Equality is Better for Everyone*, London: Penguin Books Ltd.
- Wirth, L. (1938) 'Urbanism as a way of life' *The American Journal of Sociology*, Vol. 44(1), pp. 1-24.

訳者あとがき

本稿は、英国の Economic and Social Research Council 基金により設立された学際的リサーチ・プロジェクト“Conflict in Cities and Contested State”が発行するワーキング・ペーパーの第27号として2012年に発表された。著者はベルファスト・クイーンズ大学の学部生で、同プロジェクトのメンバーであるコマロヴァ博士 (Dr. Komarova) とマックナイト博士 (Dr. McKnight) が開講した授業に提出したレポートが基となっている。本文にも言及があるように、筆者はプロテスタントとカトリック間の既婚者であり、ベルファスト西部に暮らしている。この地域はプロテスタントとカトリックが隣接して居住しており、現在では双方のミューラル(壁絵)が観光の目玉となっている。

訳者も2012年3月にベルファストを訪れ、バスツアーとタクシーによるミューラル見学を体験した。2012年はタイタニック号事件から100年目にあたり、現地でも入手した複数のバスツアー・パンフレットを見たところ、いずれのツアーもタイタニック号が建造されたドックエリアとミューラルが集中する西部エリアが見どころの2本柱になっていた。タクシーによるミューラル見学は、プロテスタント地区とカトリック地区に赴き、タクシーを下車して、

ドライバーによるミューラルの説明を受けるというものである。ドライバーは「中立的な説明」を心がけているようであったが、プロテスタント地区では住宅街に入って車を止め、住居の横壁に描かれたミューラルの一枚一枚を解説したのに対して、カトリック地区では大通りの壁面に並ぶミューラルの全体像を紹介したのみで、サッチャー前首相をお尋ね者に見立てた絵などについては何の指摘もなかった。よって、このドライバーがプロテスタントであろうことは容易に推察できた。

プロテスタントとカトリックの居住地区が接する場所に建設されたショッピング・モールは、一見「共有空間」あるいは「中立空間」を装いつつも、両者が異なる出入り口を利用して摩擦を回避しており、分断は依然目に見えるものであるという指摘などは、筆者の生活体験に基づく考察であり、ツアーでは語られないものである。このような指摘、つまり、「何が語られないか」を知ることを通して、「和平合意後」のベルファストが観光都市として何をアピールしようとしているかをより明確に把握することができ、本稿は興味深い論考である。

ちなみに、2011年の国勢調査によると、ベルファスト市の人口は280,962人。このうち、プロテスタントは42.3%、カトリックは48.6%と、カトリックが上回っている。10年前の2001年の国勢調査では、プロテスタントは48.7%、カトリックは47.2%と、プロテスタントがやや多かった。

注

- 1) 大規模再開発の先駆けとして1980年代後半から20年近くに及ぶラガン川沿いの一連の再開発が実施された。